

飯田線とカネト

国鉄(現在のJR)飯田線の三河川合から天竜峡の部分を三信鉄道としました。三信鉄道は昭和十二年七月に開通しました。

鉄道開通報告書には「もっとも困難を感じたるは、天竜川に沿う路線を決定すべく限定せられたるため、断崖絶壁の中腹を通過するの止むを得ざるを以て……」と述べられ、いかに敷設の道が険しかったかを知ることができます。



三信鉄道(飯田線の前身)

更に報告書は、「北海道旭川付近に居住し、鉄道測量に熟練せるアイヌ人十数人を招致した」と述べています。そのアイヌ人測量者たちの引率者が川村カネトでした。

カネトは上川第三尋常高等小学校に入學しました。「小学校に入ると子どもたちが輪になってとり囲み、『アイヌ、アイヌ』と手を打ってあざける。それが悲しく休み時間になると、一

番先に教室からとび出し、学校の縁の下にもぐりこんでジーンと息を殺した。始業の鐘で一同が教室に入ったのを見送っておすおすと教室に入った。入学と同時にアイヌ民族に対する軽蔑、愚弄とたたかいたった。」と後に語っています。

卒業後、カネトは鉄道の測量作業員として奉職します。測量作業員には差別待遇があり、内地人の日給が二十五銭に対し、アイヌ人は十五銭だったといえます。カネトが測量で歩いた距離は当時の国鉄の半分に及びました。宗谷線の測量では巨大な熊との戦いの連続でした。

鉄道雇員試験に合格しようとして働きながら勉強しているカネトに対する周りは執拗に妨害したといえます。試験に合格したカネトは、「アイヌのくせに」「アイヌなどには使われたくない」という反発に直面しました。その反発は、日増しにつのるばかりでした。卓越した測量技術を見こまれ、旭川区役所土木課に勤務したこともあり、現役

兵として軍隊に入隊もしました。しかし、いずれの場合も迫害を受け続けました。昭和五年、断崖が続く天竜峡の測量をやり遂げたカネトは、仕事振りを見こまれ、現場監督を任せられました。

天竜峡トンネル工事では花崗岩内部の断層による湧水・落盤が起りました。会社は設計変更をして、この湧水・落盤した箇所をコンクリートで巻くことにし、カネトを監督にあたらせました。落盤した穴の表面だけコンクリートを巻いてすませようとする作業員に対し、やり直しを命じるカネト。

アイヌ人に使われるという不満のあった作業員たちは、難工事の連続で不満がたまり、カネトを穴に押し込めコンクリートで埋めようとした。カネトはひるむことなく、作業員たちを説得しようとした。急を聞いて駆けつけた親方たちによって、カネトはようやく穴から這い出ることができました。その事件を機に作業員たちが心から尊

敬するようになったといえます。

昭和七年、三信鉄道の天竜峡門島間が開通するとカネトは北海道に帰りました。

それから三十年あまりたった、昭和三十五年春、天竜峡観光協会と旧三信鉄道沿線各町村等が当地発展の恩人の労苦をねぎらうため、カネトとカネトの家族を伊那谷に招待しました。

「各地とも小中学校、公民館に出演して、講演、アイヌの歌謡、夜は歓迎会。天竜峡では掛舞台出演、花祭りには空前の人出であった。」とカネトは当時の様子を述べています。



測量やアイヌ文化について語るカネト氏 (飯田市 今村真直氏提供)

「小さい。北海道の開拓にささやかではあるが努力をしてきたアイヌの子どもを、いまだに差別し、のしるとはどういふことか。私は反省を求めたいと思う。アイヌの本当の歴史、姿を知ってほしい」と語っています。

川村カネトは昭和五十二年にその生涯をとじました。

(私の身の土)川村カネト 旭川・川村カネトアイヌ記念館より)